

# 米国における1960年代の音楽療法士養成教育と 音楽療法に関する研究

— NAMT の刊行物および当時の実践を中心に —

安宅 智子

(2009年10月6日受理)

A Study on Education of Music Therapist  
and Music Therapy Practices in the United States in the 1960s  
— At the center of NAMT's publications and music therapy practices then —

Tomoko Atake

**Abstract:** This study presents a historical perspective of the education of music therapists in the United States in the 1960s-1970s and addresses the innovative aspects of music therapy advocated by the National Association of Music Therapy (NAMT). First, relevant articles published in *The Journal of Music Therapy* are examined to clarify NAMT's concept of music therapist education. Secondly, practical examples proposed in the books *Music in Therapy (MT)* and *Therapy in Music for Handicapped Children (TMHC)* are explored to illustrate the practices of music therapy current in the United States in the 1960s. NAMT successfully extended its clinical modalities by incorporating behavioral psychology practices. This scientific approach is highly appreciated in *MT*, whereas it is not as significantly valued in *TMHC*. This ideological difference triggered an erosion of solidarity among the members of NAMT, which eventually led to the establishment of two independent academic conferences in the early 1970s. The author concludes from the present survey that: (1) music therapy enjoyed the scientific benefits of behaviorism in the 1960s, and (2) this led to the formation of two distinctive streams of philosophy of music therapy in terms of perspective and methodology.

Key words: education of music therapist, journal, NAMT, United States, 1960's  
キーワード：音楽療法士養成教育，刊行物，NAMT，米国，1960年代

## 1. 研究の背景と目的

米国において、現在の専門職としての音楽療法の始まりは、第1次、第2次世界大戦の退役軍人に対する

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：三村真弓（主任指導教員）、古賀一博、  
千葉潤之介、七木田敦

慰問音楽活動であった。1950年に全米初の音楽療法士の職能兼学術団体としてNAMT (National Association for Music Therapy) が設立されるまで、音楽療法は精神科領域を臨床現場の中心として発展してきたといえよう。Shreve (1976) によれば、20世紀初頭から1950年までの音楽療法は、活動療法もしくは補助的な療法として認識されており、当時の音楽療法士たちは、音楽が行動に直接的な影響を及ぼすことを信じている音楽家を中心となっていた<sup>1)</sup>。しかし、音楽療法研究

の傾向として、心拍数や血圧などの変化に着目した生理学的研究や、音楽の嗜好や心情に着目した心理学的研究が盛んになっていくことで、音楽療法士には音楽的能力だけでなく、心理学的知識や技術が徐々に必要とされるようになり、音楽は主要な存在から副次的な存在へと変化することとなった<sup>2)</sup>。このように音楽療法士をとりまく環境は徐々に変化していったが、「音楽療法はまだ組織された臨床の専門家としての社会的立場をもっていなかった<sup>3)</sup>」と栗林が述べているように、その社会的地位は危ういものであった。

専門職としての音楽療法士の環境が整ってきたのは、1940年代に入ってからであり、そこにはGastonをはじめとした音楽療法教育者や精神科医らの尽力があった。その結果、1944年にはミシガン州立大学に4年制の音楽療法士養成課程が設置されることとなった。当時の音楽療法士養成教育は、各大学の独自のカリキュラムに沿って行われていた。この養成課程の設置は音楽療法士の全米組織の設立を促す一因となり、1950年にNAMT (National Association for Music Therapy) が設立された。1952年、NAMTの教育部会が、音楽療法士養成カリキュラム (以下、1952年版NAMTカリキュラム) をNASM (National Association of School of Music) に提出し、承認を受けた。

このカリキュラムは全米規模での初めての音楽療法士養成教育の指針であり、理論や実技などで構成された学内トレーニングと、学外の病院で行われる臨床トレーニングの2つの柱で構成されていた<sup>4)</sup>。しかし、NAMTの刊行物に掲載された論文には、2つの柱の関連性やそれらのトレーニングの具体的な授業内容については明示されていなかった。当時行われた議論の多くは、臨床トレーニングとの関連性を視野に入れた学内トレーニングの教育内容や、より明確な臨床トレーニングの手順の構築<sup>5)</sup>に関するものであり、音楽療法士養成教育に関連した論文の内容としては、音楽療法士養成教育に必要な諸要素に言及するものから実際のトレーニングを紹介するものまで幅広く存在した。

このようにして、音楽療法士養成教育は、NAMTの提示したカリキュラムを指針として、各認定大学が定めたカリキュラムに沿って行われることになった。さらに、1957年にNASMの承認を経てNAMT認定の音楽療法士の資格 (RMT: Registered Music Therapist) が誕生した<sup>6)</sup>。その後、1975年にAAMT (American Association for Music Therapy) が設立され、NAMTとAAMTは23年間別々に活動していたが、1998年にAMTA (American Music Therapy Association) として統合されて、現在に至っている。

NAMTの活動に関する先行研究としてはBoxberger

(1963) やSolomon (1984) が、音楽療法実践の先行研究としてはShreve (1977) があげられる。Boxbergerは、1950年のNAMTの発足経緯と発足から10年間の活動内容を明らかにしている。彼女は、1956年から1959年を音楽療法士という専門職の発展期と位置付けており、その理由として、先にあげたNAMT認定の音楽療法士の資格の誕生やそのための教育の準備が行われたことなどをあげている<sup>7)</sup>。Solomonは、その後の1960年から1980年のNAMTの活動内容を明らかにしている。またShreveは、古代から1976年までの音楽療法実践の推移を扱っている。BoxbergerとSolomonの研究は、NAMTの一連の活動を包括的に検討した歴史研究であり、ともに音楽療法士養成教育についても触れている。しかし、あくまでもNAMTの活動の1部として捉えているため、音楽療法士養成教育の傾向や関心の推移に関しては、検討の余地が残されている。Shreveは、音楽療法実践に関して、一般書や大学の紀要、NAMTの刊行物など広範に扱って研究しているが、NAMT設立の1950年以降はNAMT関係者の実践のみが占めており、後のAAMT関係者の実践については十分に扱われていないことに加え、NAMTとAAMTという2つの全米団体に着目した文脈では語られていない。

これまでに筆者は、1950年代のNAMTの刊行物に掲載された音楽療法士養成教育に関連する論文の内容から、NAMTの初期の音楽療法士養成教育観の特徴として、①臨床に応用できる専門的能力の育成、②音楽療法士としてのパーソナリティーの向上、の2点に関心が寄せられていたことを明らかにした<sup>8)</sup>。1960年代の音楽療法士養成教育は50年代にNAMTが構築した基盤をさらに発展させたものであると推察できるが、1971年にAAMTの前身であるUFMT (Urban Federation for Music Therapists) が発足することを考慮すると、NAMTの刊行物のみを手掛かりとするには不十分であるといえる。なぜなら、UFMT発足に至った背景として、先行研究では、New York Universityの音楽療法士養成カリキュラムがNAMTに受理されなかったこと<sup>9)</sup>や、UFMTのメンバーが「NAMTの行動療法的なアプローチに反発<sup>10)</sup>」していたことなど、NAMTに対立する何らかの要因があったと考えられるからである。また、Gfeller (1978, 1995) は、NAMTの刊行物である*Journal of Music Therapy*に掲載された実践研究の手法を精神分析的、生理学的、行動学的の3種類に分類し、1967年から行動学的な実践が盛んになることを明らかにした<sup>11)</sup>。さらに彼女は、NAMTのリーダー達が科学的実験によって音楽療法の効果を証明しようとしたことにより、行

動主義的もしくは医学的な理論の枠組みによる臨床実践が普及したこと<sup>12)</sup>を指摘していることから、NAMT 自体もこの時期に音楽療法の方向性を具体化させていったといえる。このように、1960年代は音楽療法実践に変化が訪れた時期であっただけでなく、1970年代のAAMT 設立への流れを生み出した時期でもあったといえる。音楽療法士養成教育は理想とする音楽療法士を育成することを目的としており、それゆえに、その当時の音楽療法実践を明らかにすることは、その時代の音楽療法士養成教育で必要とされていたものは何だったのかを明らかにする手掛かりの1つとなると考える。したがって、1960年代の音楽療法士養成教育と、NAMT 側と後のAAMT 側の代表的な音楽療法実践の双方を明らかにすることで、より包括的に音楽療法士養成教育の歴史的変遷を捉えたい。

本稿では、1960年代の音楽療法士養成教育および音楽療法の諸相と特徴を探ることを目的とする。まず、1960年代のNAMT の音楽療法士養成教育観を、NAMT の刊行物に掲載された音楽療法士養成教育に関連する論文の内容から析出する。次に、1960年代の音楽療法観を、*Music in Therapy*<sup>13)</sup>と*Therapy in Music for Handicapped Children*<sup>14)</sup>を用いて明らかにする。*Music in Therapy*は、カンザス大学の教授でNAMT 会長を務めたGaston を編者に、当時のNAMT 認定校に所属する音楽療法教育者や第一線で活動している音楽療法士によって執筆され、1968年に出版された著書であり、当時のNAMT 側の音楽療法実践や音楽療法観、音楽療法の研究手法が示されたものである。一方、*Therapy in Music for Handicapped Children*は、のちにAAMT の代表的な担い手となるNordoff とRobbins によって執筆された実践書である。これら現場の音楽療法士たちに向けて執筆された両書の内容を明らかにした上で、当時の音楽療法観を考察したい。以上により、1960年代の音楽療法士養成教育と音楽療法の諸相および特徴の一端を解明する。

## 2. 1960年代のNAMT の音楽療法士養成教育観

### 2.1 1960年代のNAMT の刊行物に掲載された養成教育に関する記事の概要

1960年代のNAMT の刊行物には、*Proceedings of National Association for Music Therapy* (1951-1962)、*Bulletin of the National Association for Music Therapy* (1950-1963)、*Journal of Music Therapy* (1964-) の3種類が存在した。*Journal of Music Therapy* は *Bulletin of the National Association for Music*

*Therapy* と *Proceedings of National Association for Music Therapy* の後続誌にあたるが、学会誌としての性格が強調されており、年1回の総会の報告書のような性格の *Proceedings of National Association for Music Therapy* が担っていた内容は、減少している。

#### (1) *Proceedings of National Association for Music Therapy*

本誌において、音楽療法士養成教育に関する内容を含んでいた論文は、以下の3点であった。論文の題目、執筆者名を以下に示す。

表1 *Proceedings of National Association for Music Therapy*

年	題名	執筆者
1960	次の10年間	Gaston, T.
1961a	精神医学音楽療法-専門職としての再検討-	Braswell, C.
1961b	精神科領域における音楽療法の今後	Braswell, C.

Gaston (1960) は、音楽療法の今後の展望を述べ、養成教育については主に、①学部段階の教育整備、②大学院教育の充実の2点を指摘した<sup>15)</sup>。①学部段階の教育整備に関しては、より良いカリキュラムの検討や、より多くの音楽療法士養成課程の設置、そして期待される学生像に関する綿密な調査を行うことの必要性について述べている<sup>16)</sup>。さらに学部レベルの養成教育として、社会学や人類学や心理学が必要であると強調している<sup>17)</sup>。また、均質な臨床トレーニングの提供の必要性についても言及している<sup>18)</sup>。

②大学院教育の充実に関しては、修士課程における音楽療法トレーニングの枠組みが定まっていないという現状を明らかにしており、臨床内容において一定の水準を保ちながらも音楽療法研究により力を入れることを提案している<sup>19)</sup>。さらに音楽療法研究やスーパーヴィジョン、管理者としての教育の必要性についても言及している<sup>20)</sup>。1961年に音楽療法士養成教育における修士課程がNASMによって受理されたこと<sup>21)</sup>を鑑みれば、大学院における養成教育は、より具体的に議論される必要性が出てきたともいえる。また彼は、高校生や音楽関係者や医療関係者たちに音楽療法士という専門職を認知してもらう必要性についても言及していた<sup>22)</sup>。

Braswell (1961a) は、精神科領域における音楽療法の発展(フロイトの精神分析から社会心理学や集団力学へ)を紹介している。彼は、音楽のなかに潜在的な治療的要素が含まれていると考えられている間は、実験的な調査はほとんど不可能である<sup>23)</sup>とした。その背景として、彼は(当時の)精神科領域における音

音楽療法実践において、いくらかの心理学的なトレーニングを積んだ“よく訓練された音楽家”<sup>24)</sup>が必要とされていたことを述べた上で、そのような音楽療法士の用いた手法では治療的根拠を見いだせないと言を呈した。さらに、治療的可能性は音楽ではなく活動のなかにあり、音楽のなかにある治療的可能性との混同を避けること<sup>25)</sup>を強調していることから、音楽のもつ潜在能力に対する当時の過度の強調に対して警鐘を鳴らしているといえる。

さらにBraswell (1961b)は、精神科領域における音楽療法に対する今後の展望を示す上で、音楽療法士養成教育に対して、①音楽教育から分離し、音楽または自然科学の学部に属すること、②音楽療法士養成課程を5年にすることを提案した<sup>26)</sup>。

*Proceedings of National Association for Music Therapy*には、養成教育現場の取り組みなどではなく、養成教育のシステムに関する内容が掲載されていた。Gastonは、養成教育の充実に向けてより幅広い学問領域を扱う必要性を述べたほか、音楽療法士を養成する教育者の育成として大学院教育が必要であると主張した。Gastonは、音楽療法士が専門職として認知されるための礎を築いた中心人物であり、音楽療法士養成教育面においても多くの功績を残している。彼の所属先であったカンザス大学は、全米で初めて大学院での音楽療法士養成教育を開始した大学であり、このような背景から大学院レベルでの音楽療法士養成教育の必要性を主張していたといえる。また、Braswellによる、音楽のもつ治療的可能性への過信に対する警鐘や、音楽療法が自然科学に接近する必要性の主張を鑑みると、音楽の力によって心的ストレスの軽減を図るなどの従来のやや主観的な臨床実践とは別に、何らかの明確な問題点を見出した上で治療を行うといった客観的な姿勢を重視した新しい臨床実践の方向性が見出され始めたといえる。

## (2) *Bulletin of the National Association for Music Therapy*

本誌において、音楽療法士養成教育に関する内容を含んでいた論文は、以下の4点であった。論文の題目、執筆者名を以下に示す。

表2 *Bulletin of the National Association for Music Therapy*

年	題名	執筆者
1962	知的障害者施設における音楽家は療法士か？教育者か？	Cotton, P. D.
1962	子ども病院における音楽療法学生のトレーニング	Lathom, W.
1963	音楽療法臨床トレーニングプログラムの評価	Minard, C. M.
1963	臨床トレーニングにおけるいくつかのメモ	Williams, T.

Cotton (1962)は、知的障害者施設における音楽家が療法士か教育者かという問いに対し、音楽療法の領域に属すると述べている<sup>27)</sup>が、音楽療法士は他職種との連携によるチームアプローチをとるべきであるとした上で、養成教育に対して音楽的トレーニングのみでは不十分であることを指摘している<sup>28)</sup>。また、知的障害領域の音楽療法士が、精神科領域の音楽療法士よりも少ないことを述べた上で、音楽療法士養成教育においてもこの領域の学習をより積極的に取り扱うことを要求している<sup>29)</sup>。

Lathom (1962)は、自身の所属する子ども病院(パーソンズ病院)におけるインターンに関する試みを紹介している。NAMTの規定では、音楽療法士養成教育において必須である6カ月のインターン終了後、児童領域での音楽療法実践を希望する学生に対して行われる3カ月のインターンが存在する。児童領域の音楽療法に対するトレーニングとして、パーソンズ病院では将来的に、①児童領域での音楽療法実践を希望する学生には6カ月のインターンの実施、②まだ決めかねている学生には3カ月のインターンの実施、特殊教育に対する音楽教育に関するワークショップの実施が予定されていることが記されている<sup>30)</sup>。

Minard (1963)は、インターンの前、インターン中、インターンの後に音楽療法士のイメージを問う質問を学生に行い、この手続きが音楽療法士養成教育に有効かどうかを検証した。

Williams (1963)は、主として自身が所属するカリフォルニア州の病院における臨床トレーニングについて紹介している。彼は、大学内での養成教育(学内トレーニング)についても触れており、教室での伝統的な授業よりも自分たちの専門性の発展により貢献できるような方法を身に付ける必要があると述べている<sup>31)</sup>。

*Bulletin of the National Association for Music Therapy*では、*Proceedings of National Association for Music Therapy*とは対照的に、音楽療法士養成教育における現場の声がほとんどを占めていた。彼らの主張は、従来の音楽療法士養成教育の見直しを求めるものであった。それらは、療法する対象を拡大することや、チーム医療の一員としての音楽療法士養成教育を行うことであった。*Proceedings of National Association for Music Therapy*でBraswellが主張した、音楽中心の従来の音楽療法を見直す意見とは異なったが、いずれにせよ音楽療法士にとって音楽だけが重要なのではないという風潮が存在していたといえよう。

## (3) *Journal of Music Therapy*

本誌において、音楽療法士養成教育に関する内容を含んでいた論文は、以下の4点であった。論文の題目、

執筆者名を以下に示す。

表3 *Journal of Music Therapy*

年	題名	執筆者
1964	音楽療法士のトレーニングの発展	Gaston, E. T.
1965	新しい音楽療法カリキュラム	Madsen, C. K.
1969	音楽療法士とは何者か	Moreno, J.
1969	学部教育の役割としての音楽療法の研究例	Michel, D. E. Madsen, C. K.

Gaston (1964) は、*Music in Therapy* を出版するきっかけとなった共同研究計画について述べている。

Madsen (1965) は、現行のカリキュラムについて専門職としての音楽療法士の在り方を提示しつつ、改訂案を提案している。彼は何の音楽をいつどのように用いるかを音楽療法士たちに知らせるような研究が不足していること<sup>32)</sup>を指摘するとともに、音楽療法士養成教育においては演奏能力の向上に終始してしまうことに懸念を示している<sup>33)</sup>。したがって彼は、①音楽史は1年で十分であること、②主専攻楽器の修年数は1年間のみにする必要があること、③基礎的な音楽理論の履修年数も1年間のみにする必要があること、の3点を主張した<sup>34)</sup>。①では、音楽療法士は音楽史を専攻しているわけではないことを理由にしており、②では、音楽療法士は演奏家ではないことを理由にするとともに、もし高度な演奏能力を獲得したいならば、個人的にそのような機会を別に作ること<sup>35)</sup>を提案している。そして③では、先行研究からの示唆を踏まえた上で、基礎的な音楽理論に割かれる時間は必要最小限でいいのではないかという立場を示した。このように彼の提案の根底には、音楽療法士養成教育の内容のなかで、音楽分野の割合が必要以上に占めているのではないかという疑問が存在していたといえる。

Moreno (1969) は、音楽療法士とはいかなるものなのかを中心に述べており、臨床に関しては適切な手法を用いることができるよう指摘している<sup>36)</sup>。また、音楽療法士は音楽家であつ行動科学の領域で働く人間であるべきであると述べている<sup>37)</sup>。

Michel と Madsen (1969) は、行動心理学に依拠した音楽療法の研究手法を学部教育のなかでも学ぶことの有用性について述べている<sup>38)</sup>。

*Journal of Music Therapy* では、*Proceedings of National Association for Music Therapy* と同様に、臨床トレーニング現場からの主張ではなく、現行の音楽療法士養成教育に対する改善案や音楽療法士のアイデンティティーを問う内容が掲載されていた。ここでも、Madsen によって音楽療法士養成教育における音楽分野に関する教育内容の削減が主張されている。その削

減理由を鑑みると、音楽療法士は演奏家でもなければ歴史家でもないといった、音楽療法士のアイデンティティーを模索している印象をうける。また Moreno, Michel と Madsen は、音楽療法における行動科学の必要性を主張している。それまでも客観的な視点を音楽療法に持ち込む必要性が指摘されていたが、音楽療法士養成教育に関連した論文において行動科学と記されたのはこれが初めてであった。

## 2.2 1960年代のNAMTの音楽療法士養成教育観

以上を踏まえて、1960年代のNAMTの音楽療法士養成教育観について考察する。1960年代のNAMTの音楽療法士養成教育は、臨床現場からの提言と、臨床現場以外からの提言では異なる特徴がみられる。臨床現場からの提言の多くは、Cotton が指摘した臨床領域の拡大の必要性や、Lathom による児童領域でのインターンの紹介など、自身の所属する施設の試みなどを紹介するものであった。一方、臨床現場以外からの提言の多くには、音楽療法士の専門性に着目した内容が多く見られた。彼らが専門職としての音楽療法士に要求したことは、より客観的な視点をもつこと、すなわち科学的側面を強化することであった。科学的側面の強調は、音楽史や音楽理論といった音楽分野の学習を削減する提言や、音楽療法を音楽教育と分離して、科学の1分野として位置付けようとする言及からも明らかであり、音楽的側面が軽視される傾向にあったことがわかる。また Michel と Madsen が学部教育において行動心理学に依拠した研究手法を学ぶ必要性を述べたことを踏まえると、音楽療法研究にまで科学的側面の強調は広がっていたといえよう。

したがって、1960年代のNAMTの音楽療法士養成教育観の一端としては、臨床領域の拡張と、科学的側面を強調した専門性の確立の2点があげられる。

## 3. 1960年代の音楽療法観

ここでは、*Music in Therapy* および *Therapy in Music for Handicapped Children* の構成および音楽療法の定義を明らかにしたうえで、両書にみられる音楽療法実践の傾向や特徴を明らかにする。

### 3.1 *Music in Therapy* に見られるNAMTの音楽療法

#### (1) 構成

本書は、先に述べたようにGastonを編者として執筆されたものであり、1964年の*Journal of Music Therapy*にて紹介された研究を基盤としている。その内容は、音楽療法の概論(1章)に始まり、様々な対象(児童、成人、高齢者)に対する実践の紹介(2章~6章)、音

楽療法と音楽教育（7章）、ダンスセラピー（8章）、音楽療法が行われる臨床現場からみた音楽療法（9章）、そして音楽療法研究の手法（研究の組み立て方および、統計処理の解説）の紹介（10章）の計10章で構成されており、執筆者は事例を含むと59名にのぼる。

## (2) 本書における音楽療法の定義

Gaston は序章において、音楽療法の目的として、①対人関係の確立および回復、②自己実現をととした自尊心の発生、③リズムの活用による秩序の回復、および活力を与えること<sup>39)</sup>の3点をあげた。Gaston は、第1章「人間と音楽」において音楽療法の理論的基盤として、行動科学をはじめとした科学的な態度をあげている。しかし、「その他の知識源や手引きを除外して、人間の目に見える行動を研究するのは最良の手順ではない<sup>40)</sup>と述べていることや、哲学に関心を寄せていること<sup>41)</sup>から、必ずしも目に見える行動のみに終始した極端な行動主義を掲げているとはいえない。また、音楽療法の目的を、「不適切な行動を、より望ましい行動へと変化させるもの<sup>42)</sup>としているが、この行動には内的な刺激に対する反応も含まれるとしている<sup>43)</sup>。

Sears は、第2章「音楽療法の過程」において音楽療法のプロセスを3段階に分けている。それらは、①構造内の経験（音楽的な構造に触れること）、②自身を組織化する経験（即興演奏などの自己表現）、③他者と関連付ける経験（グループ内の人などとの触れ合い）である<sup>44)</sup>。Sears はこの分類を、行動主義的で、論理的で、心理学的なものである<sup>45)</sup>と述べ、音楽療法が行動科学と密接に結びついていることを強調している。

以上から、本書における音楽療法は、問題行動の改善によってもたらされる自尊心や社会性の獲得を目的とするとともに、それらが獲得される過程においては科学的視点を取り入れることにより、より客観的な臨床体系を確立しようとしていたといえる。

## (3) 本書における事例の傾向および研究の手引き

### ①事例の傾向

本書の大半は、事例で占められているが、対象領域における先行研究の紹介、病理に関する知識や用語、施設の種類などの情報も紹介されている。事例は1950年代から1960年代の実践報告がほとんどを占めているが、それらの多くはNAMTの刊行物や本書の理論的な章において主張された科学的・客観的な研究手法が用いられたものではなく、音楽療法を通じてもたらされたと考えられる機能的な回復、社会性の獲得などのケース・スタディーであった。このように、実際の音楽療法実践が理論面の要求に十分に対応ができていなかったにせよ、音楽療法士が治療プログラムを組んだ上でその効果を確かめようとする姿勢は一貫して存在

した。

また、当時の音楽療法士養成教育の臨床トレーニングが精神科領域を中心に行われていたことを鑑みると、本書において児童領域や高齢者に加え、地域社会や学校といった多様な現場の事例を扱ったことは画期的であったといえるとともに、現場の対象領域の拡大化は、*Bulletin of the National Association for Music Therapy*で主張された音楽療法士養成教育における対象領域の拡大化の必要性を裏付けているといえよう。

### ②研究の手引き

本書の特徴として、研究の手引きが記載されていることがあげられる。研究に関する内容は3つの章で扱われている。それらは、①研究の課題設定や、先行研究の検討、研究計画の作成といった研究の枠組みの構築、②様々な統計処理の紹介、③実験的な研究としての事例の紹介であり、量的な研究手法のみを扱っている。

## 3.2 *Therapy in Music for Handicapped Children*

### に見られる Nordoff と Robbins の音楽療法

#### (1) 構成

本書の著者は、後に“ノードフォーロビンス音楽療法<sup>46)</sup>と呼ばれる音楽療法の一系統を確立した、Nordoff と Robbinsである。“ノードフォーロビンス音楽療法”とは、米国の作曲家でピアニストであったNordoffと、英国のシュタイナー施設で特殊教育家として勤務していたRobbinsによって開発された「即興演奏を用いた個人・集団療法へのアプローチ<sup>47)</sup>である<sup>48)</sup>。

本書は、1959年から1967年にわたって行われた臨床実践の要約であり、その構成は、①サン・フィールド共同体での活動（1959年9月～1960年6月）、②ヨーロッパ訪問時におけるデモンストレーション（1960年6月～11月）、③ペンシルヴェニア州でのデモンストレーション（1961年7月）、④カンザス州ロゴペディックス研究所でのプロジェクト（1961年9月～1962年3月）、⑤ペンシルヴェニア大学小児精神科自閉症通院養護室でのプロジェクト（1962年5月～1967年5月）、⑥フィラデルフィア学区の特殊教育プログラム（1962年11月～1967年3月）と、ほぼ時系列に沿っている。

#### (2) 本書における音楽療法の定義

Nordoff と Robbins は、本書を、障害児に対する音楽療法の手引であり、音楽療法の音楽的、心理学的な可能性の範囲や重要度を例証するもの<sup>49)</sup>と位置付けている。本書の目的は、音楽的かつ技術的な関連をもつ諸原理を活動のなかで創造的に用いることにより、療法としての音楽の扱いに関する幅広く実践的な方向付けを提供すること<sup>50)</sup>であった。しかしNordoff と Robbins は、本書を「障害児に対する音楽療法の手引」と位置付けているが、障害に関する一般的な説明や、

セッション手順の提示といった知識やノウハウは提供していない。

### (3) 本書における事例の傾向

本書全体を概観すると、臨床実践における音楽の使われ方に比重が置かれており、Nordoffが考案した音楽劇や音楽ゲームに取り組むクライアント（子どもたち）の反応（どのように歌っているか、または演奏しているか）や、Nordoffの音楽的に特徴付けられた即興演奏（不協和音や、アラビア風など特有のムードを有する音楽の提示）に対する反応の描写、またその反応に対するセラピスト（Nordoff）の援助と、その援助に対してのクライアントの反応の考察が試みられている。

事例が提示されているのとは別に、本書では各時期における2人の関心事やそれに対する取り組みや気づきが紹介されている。例として、サン・フィールド共同体での活動時では、即興演奏を用いた音楽療法に対する子どもたちの多様な反応から、「子どもたちは、即興的な音楽に反応しながら、その子自身の音楽的な自画像を作り出している<sup>51)</sup>」という見解を述べており、クライアントの音楽的反応を中心に臨床経過や成果を見出そうとする姿勢がうかがえる。

また、カンザス州ロゴペディックス研究所でのプロジェクトにおいては、音楽療法を受けた145人の子どもたちを観察し、13の反応類型を作成した。これは、即興演奏を行った際のクライアントの行動に対し、有効的なアプローチの手がかりを得るという点で有用なものであった。クライアントの行動を彼らは音楽的地勢（musical geography）<sup>52)</sup>と呼んでおり、セラピストに、臨床を通じてこの地勢を秩序立てることを要求した。

### 3.3 両書の音楽療法に見られる1960年代の音楽療法観

両書より、1960年代の音楽療法観を考察する。

*Music in Therapy*では、音楽療法の原理や理論基盤に科学的視点を取り入れる必要性が示されたが、掲載された事例は、機能回復や社会性の獲得といった目に見える行動の変化に着目しつつも、科学的視点をもっているとは言い難いものであった。しかし、統計処理などをはじめとした量的な研究手法を積極的に扱おうとしていた点で、*Music in Therapy*は当時の音楽療法に科学的視点を導入することの重要性を啓蒙していたといえよう。この科学的視点は、NAMT刊行物にみる養成教育に関係した記事においても、行動科学や心理学に対する積極的な扱い方として表れていた。科学的視pointsの強調は、当時、行動心理学が盛んであったという時代の追い風を受けつつ、客観的に音楽療法の効果を実証しようとしたことの結果であろう。

一方、*Therapy in Music for Handicapped Children*では、音楽的側面から臨床を解釈しようとしており、*Music in Therapy*で示された科学的視点はほとんど存在していない。*Therapy in Music for Handicapped Children*に掲載されていた事例に関しては、臨床の経過の記述方法は*Music in Therapy*に掲載された他の事例とほとんど変わりなかったが、内容はより音楽的側面に重点がおかれている。つまり*Therapy in Music for Handicapped Children*は、従来の音楽療法にみられる音楽中心の手法をとりながらも、さらに音楽的側面から臨床を解釈するというオリジナリティーを有していたといえる。

したがって、1960年代の音楽療法観は、専門職としての確立や心理学の流行を背景に、NAMT側が従来の音楽療法の臨床手法に科学的視点を取り入れるという大きな方向転換があった一方で、そのような方向転換に同意せず、NordoffとRobbinsのように、様々な音階や和音を駆使した即興演奏を行うといった、従来の音楽療法実践の形をとりながらも、さらにその手法を発展させた臨床実践が同時代に存在していた。このことは、米国の音楽療法の主流であるNAMTの打ち出した方向性とは異なる流れが60年代にすでに生まれていたことを示唆している。

## 4. 1960年代の音楽療法士養成教育および音楽療法の諸相と特徴

以上のように、1960年代のNAMTの音楽療法士養成教育観および1960年代の音楽療法観を探るべく、関係諸資料を分析してきた。その結果、1960年代のNAMTの音楽療法士養成教育と音楽療法の諸相およびその特徴について次のようなことが指摘できよう。

1960年代のNAMTの音楽療法士養成教育は、臨床領域の拡大など、1950年代に構築された養成教育基盤をさらに発展させたことはもちろん、何よりも行動科学をはじめとした科学的視点を導入しようとしたことが特徴の1つであったといえる。科学的視pointsの導入を受けて、音楽療法士養成教育では、音楽的内容の削減という形で、それまで音楽療法士の専門性の1つとして重要視されていた音楽的側面が削減された。そこには、従来の音楽療法の治療的根拠が音楽のもつ潜在的な力に依拠しすぎているという反省や、音楽療法士のアイデンティティーを確立する上で、演奏家など他職種との区別をしようとする意図が含まれていた。また音楽療法研究においては、学部教育において科学的な研究手法を学ぶ重要性が指摘されたことから、科学的視pointsの影響を十分に受けていたといえる。

しかし、音楽療法実践はその要求された科学的視点を十分に満たすものではなかった。*Music in Therapy*では、編者であるGastonを中心として音楽療法における科学的視点の必要性が指摘され、NAMTの音楽療法士養成教育や音楽療法研究と同一の方向性を示した。実際に紹介された音楽療法実践は、初期の音楽療法にみられる音楽の力に依拠するものではなく、セラピストが考えた治療手順によって効果を見い出そうとするものであったが、統計処理など科学的視点として求められた客観性は十分に反映されていなかった。

一方、NordoffとRobbinsによって執筆された*Therapy in Music for Handicapped Children*は、音楽的側面に臨床の可能性を見い出そうとしていた。彼らの音楽療法は、臨床実践において音楽的側面から臨床を解釈する手がかりを見つけようとしていたほか、不協和音や西洋音楽以外の音階を用いたより自由な即興演奏でクライアントである子どもたちと関わろうとするものであった。

このように、1960年代のNAMTの音楽療法士養成教育と音楽療法では、1950年代の音楽療法実践における課題を克服するために、NAMTによって見い出された科学的視点が強調された。しかし、音楽療法実践ではNAMTの方向性を踏襲する流れと、それとは別にNordoffとRobbinsの音楽療法に見られる異なる流れの2つが存在し、AAMT設立の素地が音楽療法実践面においてすでに形成されていたといえる。この音楽療法実践の分離は、60年代のNAMTの音楽療法士養成教育に対して、直接的な影響を与えることはなかった。それは、当時NordoffとRobbinsの音楽療法がマイノリティであったことも一因であるといえる<sup>52)</sup>が、行動科学が全盛期を迎えていたこの時期において、音楽療法士養成教育では音楽的な内容が削除する方向へと向かっていったことも一因であるといえよう。

## 【注及び引用文献】

- 1) Shreve, H. S. "Music Therapy: An Historical Overview to 1976", Ph. D. dissertation, Boston University School of Education, 1977, p.vi.
- 2) Ibid.
- 3) 粟林文雄／日野原重明監修『標準音楽療法入門 上 理論編』春秋社, 2002, p.25.
- 4) 安宅智子「米国の音楽療法士養成教育に関する研究—NAMTの初期の刊行物にみる養成教育観の形成を中心に—」『音楽教育史研究』第11号, 2008, p.10.
- 5) 同上.
- 6) Robbins, C., *A Journey into Creative Music*

*Therapy, Barcelona Publishers, 2005, pp.44-45.* (邦訳: 生野里花『音楽する人間 ノードフォーロビンス 創造的音楽療法への遙かな旅』春秋社, 2007)

- 7) Boxberger, R., "A Historical Study of the National Association for Music Therapy", Ph. D. dissertation, University of Kansas, 1963, p.153.
- 8) 前掲書4)
- 9) Solomon, A., 1985 op. cit., pp.275-280にて、NYUとのやり取りの内容が示されている。また、Robbins, C., 2005, op. cit., pp.104-105においても、養成教育に対する考え方の違いが協会設立のきっかけであると述べられている。
- 10) 岡崎香奈「米国での音楽療法事情」『心療内科』第6巻(2), 2002, p.104, また、筒井末春「音楽療法の歴史と発展: 心療内科の立場から」『心身医学』第42巻(12), 2002, p.803においても、ほぼ同じ内容が指摘されている。Gfeller (1995) は、NAMTが「行動主義的または医学的な理論モデルで科学的実験によって音楽療法を証明しようとした」(p.42)のに対し、AAMTは「専門職のアイデンティティーと信用を確立するための手段として、臨床方法を発展または普及させようとした」(pp.42-43)と述べている。
- 11) Gfeller, K., "Status of Music Therapy Research", *Music Therapy Research Quantitative and Qualitative Perspective*, 1995, p.42.
- 12) Ibid.
- 13) ガストン・セイヤー編／山松質文監修、堀真一郎、山本祥子訳『音楽による治療教育(上巻)実践的アプローチ』岩崎学術出版社, 1971。  
ガストン・セイヤー編／山松質文監修、堀真一郎、丹下庄一訳『音楽による治療教育(下巻)応用と実験計画』岩崎学術出版社, 1972。
- 14) ノードフ, P., ロビンス, C.／櫻林仁, 山田和子訳『心身障害児の音楽療法』日本文化科学社, 1973.
- 15) Gaston, E. T., "Our Second Decade", *Proceedings of National Association for Music Therapy*, 1960, pp.178-179.
- 16) Ibid., p.178.
- 17) Ibid., p.179.
- 18) Ibid.
- 19) Ibid., p.178.
- 20) Ibid., pp.178-179.
- 21) Solomon, A., 1985 op. cit., p.127.
- 22) Ibid., p.179.
- 23) Braswell, C., "Psychiatric Music Therapy: A Review of Profession", *Proceedings of National*



- Association for Music Therapy*, 1961, p.59.
- 24) Ibid.
- 25) Ibid., p.60.
- 26) Braswell, C., "The Future of Psychiatric Music Therapy", *Proceedings of National Association for Music Therapy*, 1961, p.75.
- 27) Cotton, P. D., "The Musician in an Institution for the Retarded Therapist or Educator?", *Bulletin of NAMT*, Vol.xi, No.3, 1962, p.6.
- 28) Ibid., p.5.
- 29) Ibid., p.6.
- 30) Lathon, W., "Training of Music Therapy Students in a Children's Hospital", *Bulletin of NAMT*, Vol.xi, No.4, 1962, p.15.
- 31) Williams, T., "Some Notes, on Clinical Training", *Bulletin of NAMT*, Vol.xii, No.3, 1963, p.18.
- 32) Madsen, C. K., "A New Music Therapy Curriculum", *Journal of Music Therapy*, Vol.2, 1965, p.83.
- 33) Ibid.
- 34) Ibid., p.84.
- 35) Ibid.
- 36) Moreno, J., "The Identity of the Music Therapist", *Journal of Music Therapy*, Vol.5, No.1 1969, p.21.
- 37) Ibid.
- 38) Michel, D. E. and Madsen, C. K., "Examples of Research in Music Therapy as a Function of Undergraduate Education", *Journal of Music Therapy*, Vol.5, No.1 1969, p.25.
- 39) Gaston, E. T., "Foreword", Gaston, E. T. (ed.) *Music in Therapy*, The Macmilian Company, 1968, p.v.
- 40) Gaston, E. T., "Man and Music", Gaston, E. T. (ed.), *Music in Therapy*, The Macmilian Company, 1968, p.7.
- 41) ただし、哲学は科学的なものの次に注目すべきものとして捉えられている。
- 42) Ibid., p.26.
- 43) Ibid.
- 44) Sears, W. W., "Process in Music Therapy", *Music in Therapy*, The Macmilian Company, 1968, p.31. ただし、( ) 内は筆者加筆。
- 45) Ibid., 1968, p.30.
- 46) "ノードフーロビンス音楽療法" は、一般的に"創造的音楽療法" (Creative Music Therapy) とも呼ばれている。
- 47) ブルーシア, K./林庸二, 生野里花, 岡崎香奈, 八重田美衣訳『即興音楽療法の諸理論 (上)』人間と歴史社, 1999, p.30.
- 48) Nordoff, P., Robbins, C. *Therapy in Music for Handicapped Children*, St Martin's Press, 1971, p.17.
- 49) Ibid.
- 50) Ibid., p.34.
- 51) Ibid., p.73, ノードフ, P., ロビンス, C./櫻林仁, 山田和子訳『心身障害児の音楽療法』日本文化科学社, 1973, p.80.
- 52) Robbins (2005) よれば、60年代中ごろまで、NAMT に音楽療法士として登録されることを拒絶されたなど、彼らの音楽療法が排他的に扱われたと考えられる記述がある。